

## 総 説

## モーツァルトの《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393(385b)》 — 作曲、出版の経緯およびモーツァルトの他の声楽曲との関係 —

金谷 めぐみ\*      植田 浩司\*\*

### ＜要 旨＞

モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) が作曲した声楽曲に《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)》(以下《ソルフェージュ》と略)がある。《ソルフェージュ》は全部で5曲あり、モーツァルトが妻コンスタンツェのために書いた声楽の練習曲であったと伝えられている。これらの自筆譜にはモーツァルトによる「わが愛しい妻のために per la mia cara consorte」または「わが愛しのコンスタンツェのために per la mia cara Costanza」の一文が記されている。ちなみに《ソルフェージュ》の第2曲(ヘ長調・アダージョ)とコンスタンツェが歌ったとされる《ハ短調ミサ Missa in C minor K.427(417a)》のソプラノ・ソロ「クリステ・エレイソン(主よ 憐れみたまえ) Christe eleison」は同じ旋律である。

本論文では、妻コンスタンツェのために書かれたモーツァルトの《ソルフェージュ》について作曲と出版の経緯について記し、これまでに記述されている《ソルフェージュ》と《ハ短調ミサ》およびその他のモーツァルトの声楽曲との関係について文献的考察を行った。

**キーワード:** モーツァルト、ソルフェージュ、自筆譜、声楽曲

### 1. はじめに

音楽の教育上必要とされている声楽練習教材のひとつに「ソルフェージュ」(Solfège [仏] Solfeggio [伊])がある。17世紀、イタリアにおいては声楽教師が生徒の歌唱能力と装飾法の技能を高めるために作曲した歌詞のない練習曲が「ソルフェージュ」と称され、18世紀に入ると広く普及し、19世紀にはパリにおける音楽院の基礎教育の教材として用いられ、「ソルフェージュ」の楽譜の出版が始まった。これ以降、フランスでは「ソルフェージュ」の他に、一つ以上の母音を用いて歌う歌詞のない発声練習法あるいは演奏会用作品として作られた「ヴォカリーズ」(Vocalise [仏])も多数出版されるようになった<sup>1)</sup>。

モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) が妻コンスタンツェ (Constanze Mozart, 1762-

1842) のために作曲した声楽曲に《声楽のためのソルフェージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)》(以下《ソルフェージュ》と略)がある<sup>2)</sup>。近年、モーツァルトの研究が進むなかで、何故か《ソルフェージュ》の紹介はきわめて少なく、著者らの情報検索オンラインデータベースによる文献検索 (CiNii, EBSCOhost-RILM, IPM, RIPM および RISM) により得られた資料・文献は、以下の6編であった。すなわちブライトコプフ&ヘルテル社の楽譜『伴奏付きソプラノのためのソルフェージュと伴奏なしのソルフェージュ Solfeggien für eine Sopranstimme mit und ohne Begleitung, K.393.2-5』(1885)<sup>3)</sup>、ルチオ (Alessandro Luzio, 1857-1946)<sup>4)</sup> により『ヴェルディ通信 Carteggi Verdiani』(1947) に紹介された《ソルフェージュ》の「断片 Fragment」(以下「断片」と記す)に関する記述<sup>5)</sup>、1953年にパリのレ

\* 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科

\*\* 元西南女学院大学教授

デュック社より出版された楽譜『ヴォカリーズと練習曲 Vocalises et Exercices』と編集者ウェイナント (Maurice Weynandt, 18??-19??) の序文<sup>6)</sup>、1956年にユニヴァーサル社より出版された楽譜『ソルフェージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393』と編集者スワロフスキー (Hans Swarowsky, 1899-1975) の序文と註釈<sup>7)</sup>、『ケツヒェル作品目録 Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts』(1964)の解説<sup>2)</sup> および『モーツァルト年鑑 Mozart-Jahrbuch, 2011』に掲載されたペトロベッリ (Pierluigi Petrobelli, 1932-2012)<sup>5)</sup> の論文「モーツァルトのソルフェージュ再考 Nochmals zu Mozarts Solfeggio KV.385/1」である。2015年にはフランスのソプラノ歌手ドゥヴィエル (Sabine Devielhe, 1985-) <sup>8)</sup> によるこの《ソルフェージュ》の中の一曲を含むCDが発売された。日本においてもインターネット上に野口秀夫<sup>9)</sup> および武本浩<sup>10)</sup> によるこの《ソルフェージュ》に関する論説がある。

本論文において著者らは、モーツァルトの《ソルフェージュ》について概説し、これまでに記述されている《ソルフェージュ》と《ハ短調ミサ Missa in C minor K.427 (417a)》およびモーツァルトにより作曲された声楽曲との関係について文献的考察を行った。

## 2. モーツァルトの《ソルフェージュ》の作曲と出版の経緯およびその構成について

《ソルフェージュ》が作曲された時期は、アーベルト (Hermann Abert, 1871-1927) <sup>11)</sup> によると、1781-1785年の間とされている。《ソルフェージュ》は、モーツァルトが折々に書いた練習曲、全5曲が収集されている。すなわち声の旋律と通奏低音で書かれた4曲のソルフェージュおよび声の旋律のみ書かれた1曲の声楽練習が収録されている<sup>2)</sup>。この《ソルフェージュ》は、出版される価値がある作品として、1788年7月16日および23日、ウィーンの音楽出版社によって、「ソプラノのための声楽基礎 Singfundament für den Sopran」として公表された<sup>2)</sup>。《ソルフェージュ》の楽譜は、これまで、ライプツヒヒのブライトコプフ&ヘルテル社、パリのレデュック社、およびウィーンのユニヴァーサル社から出版されている<sup>3), 6), 7)</sup>。各出版社の楽譜は編集者により異なり、4または5曲が掲

載されており、その順番とその内容もそれぞれ異なる。ブライトコプフ&ヘルテル社の楽譜『伴奏付きソプラノのためのソルフェージュと伴奏なしのソルフェージュ Solfeggien für eine Sopranstimme mit und ohne Begleitung. K393.2-5』(1885)<sup>3)</sup> は、「断片」を除く3曲のソルフェージュと1曲の声楽練習が収録されている。ちなみに、この楽譜はリプリントされIMSLP社 (International Music Score Library Project) によってインターネット上に公開されている<sup>12)</sup>。パリのレデュック社の楽譜『ヴォカリーズと練習曲 Vocalises et Exercices』(1953)<sup>6)</sup> は、全5曲が掲載されているが、編集者ウェイナントにより伴奏が補筆され、とくに《ソルフェージュ》の「断片」が大幅に変曲されている。ユニヴァーサル社の楽譜『ソルフェージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393』(1956)<sup>7)</sup> は、《ソルフェージュ》全5曲が収録され、指揮者 (ウィーン交響楽団首席) であり、名教師 (ウィーン国立音楽大学) としても知られたスワロフスキー (Hans Swarowsky, 1899-1975) による《ソルフェージュ》についての詳細な序文と各曲に注釈が記され、伴奏は、アイブナー (Franz Eibner, 1914-1986) により補筆されている<sup>7)</sup>。

本論文では、ユニヴァーサル社から出版された楽譜『ソルフェージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393』(1956)<sup>7)</sup> に表示されている番号と表記、すなわち「ソルフェージュ1 Solfeggio 1」、「ソルフェージュ2 Solfeggio 2」、「ソルフェージュ3 Solfeggio 3」、「ソルフェージュ-断片 Solfeggio-Fragment」、「声楽練習 Esercizio per il canto」を使用し、それぞれの楽譜を検討した。

「ソルフェージュ3」の自筆譜には「わが愛しい妻のために Per la mia cara consorte」、そして「断片」の自筆譜には「わが愛しのコンスタンツェのために Per la mia cara Costanza」とモーツァルト自筆の、妻コンスタンツェへの愛の言葉が記されている<sup>2), 5), 11)</sup>。モーツァルトの妻コンスタンツェは、モーツァルトの没後、デンマークの外交官であったニッセン (Georg Nikolaus von Nissen, 1762-1826) と再婚し、彼の助けのもと亡夫の膨大な自筆譜を整理し、出版社ブライトコプフ & ヘルテル社およびオッフエンバッハ・アン・マインのアンドレ (Johann Anton Andre, 1775-1842) に楽譜を売却した。そのため、この《ソルフェージュ》は、モーツァルトの自筆譜を買い取ったオッフエンバッハのアンドレによって保有されていた<sup>5)</sup>。1879年以降、「ソルフェージュ1」の自筆譜は、ドイツ西

部地域に私有財産として保有された<sup>2)</sup>。近年刊行されたタイソン (Alan Tyson, 1926-2000) の<sup>13)</sup>『モーツァルト自筆譜の研究』によると、この「ソルフエージュ1」は、1783年にモーツァルトが妻コンスタンツェと訪れたザルツブルグで入手した縦長10段の五線紙に書かれたことが報告されている。「ソルフエージュ2」の自筆譜は散逸しているが、この楽譜のファクシミリはザルツブルク国際モーツァルトウム財団のホームページに掲載されている<sup>14)</sup>。「ソルフエージュ3」および「声楽練習」の自筆譜は、コーブルク城 (ドイツ) にあるザクセン＝コーブルク＝ゴータ公のエルンスト公爵の所有財産となっている<sup>2)</sup>。「ソルフエージュ2」、「ソルフエージュ3」、そして「声楽練習」の自筆譜は、モーツァルトがウィーンで使用した横長12段の五線譜が使われている<sup>2)</sup>。

「断片」の自筆譜について、この《ソルフエージュ》と「断片」の自筆譜の複雑な出版経緯を記し、ヴェルディコレクション所蔵の由来を考察したペトロベリ<sup>5)</sup>の貴重な論文がある。ペトロベリ<sup>5)</sup>の記述によると、1800年にコンスタンツェがオッフェンバッハのアンドレに売却した自筆譜の中には「断片」を含むいくつかの《ソルフエージュ》があり、その中の「断片」は、19世紀の初めに至るまで百年以上もの間、オッフェンバッハのアンドレの持つ豊富なモーツァルト・コレクションの中に収められていた。その後、この「断片」の楽譜は、アンドレの息子によってロンドンで競売にかけられたが、買い手がつかず、フランスの出版社に贈られ、1841年に「芸術的作品として大きな価値を持つ」、「未刊のソルフエージュ」として、パリで定期的に発行される雑誌『Le France Musicale』の定期購読者に楽譜のファクシミリが提供された<sup>5), 15)</sup>。その際、「断片」の2枚の楽譜の表裏のうち、1枚目両面の楽譜のみ掲載され、2枚目の表に書かれたスケッチは掲載されなかったという。さらにアンドレが楽譜に書き込んだ「1782」という作曲年や目録番号および署名、ニッセンが書き込んだ番号などが削除されたという。ペトロベリ<sup>5)</sup>は、「断片」の自筆譜がヴェルディコレクションに所蔵されるに至った由来は、今なお不明であるが、このフランスの音楽雑誌の編集者とイタリアの作曲家ヴェルディ (Giuseppe Verdi, 1813-1901) との交流・頻回の文通があった事実に関するのかも知れないと、推測している。モーツァルトの研究において、以上の記述は、長い間知られていなかったという。この「断片」の自筆譜は、ペトロベリ<sup>5)</sup>の論文最終頁に掲載されている。ペトロベリ<sup>5)</sup>の論文のタ

イトルが「モーツァルトのソルフエージュの再考」と記している由縁は、この「断片」がルチオ (Alessandro Luzio, 1913-1968) により『Carteggi Verdiani IV』(1947) の中で紹介されて以降、数十年間不明の状態であったからである。現在、「断片」の自筆譜は北イタリアのブッセート近郊のサン・アガタにある作曲家ヴェルディの館にヴェルディの収集品として所蔵されている<sup>5)</sup>。

### 3. 《ソルフエージュ》とモーツァルトの声楽曲

モーツァルトは、1782年8月4日、ウィーンのシュテファン大聖堂において、コンスタンツェと結婚し、翌年、父レーオポルト (Johann Georg Leopold Mozart, 1719-1787) と姉マリア・アンナ (通称: ナンネル Maria Anna Walburga Ignatia Mozart, 1751-1829) に彼女を紹介するため、コンスタンツェと共に故郷ザルツブルクへ帰郷した。この時、モーツァルトは妻コンスタンツェとの結婚の誓約としてミサ曲を作曲することを約束し、1782年から1783年にかけて《ハ短調ミサ》を書いた。2人がザルツブルクに到着した1783年7月下旬、ミサ曲は半分しかできていなかったため、モーツァルトはザルツブルク到着後も作曲を続けたが、結局《ハ短調ミサ》は未完成のまま、1783年10月26日の日曜日、二人が再びウィーンへ戻る前日に、ザルツブルク聖ペテロ大修道院付属教会において未完成の部分の別のミサ曲で補って初演された<sup>16)</sup>。1783年10月23日の練習でコンスタンツェがソプラノのパートを歌ったことは、姉ナンネルの日記に記されている<sup>17)</sup>。アインシュタイン (Alfred Einstein, 1880-1952)<sup>18)</sup>によると、ミサ曲の「クリステ・エレyson (主よ憐れみたまえ) Christe eleison」と「ラウダムス・テ (われら汝をほめたたえ) Laudamus te」は、コンスタンツェが歌うことを念頭に置いて書かれたとされる。「ソルフエージュ2」の旋律が、《ハ短調ミサ》の「キリエ Kirye」のソプラノ・ソロ「クリステ・エレyson」の旋律<sup>19)</sup>と同じであることから、この《ソルフエージュ》は、《ハ短調ミサ》にソプラノ・ソロとして出演する妻コンスタンツェの練習曲として1782-1783年に書かれたと推測されている<sup>7)</sup>。ちなみに【楽譜1】に示す《ハ短調ミサ》の「クリステ・エレyson」<sup>19)</sup>は変ホ長調「アンダンテ・モデラート (適度に早く) Andante Moderato」、【楽譜2】の示す「ソルフエージュ2」<sup>7)</sup>



【楽譜 1】モーツァルト《ハ短調ミサ Missa in C minor K.427(417a)<sup>19)</sup> の「クリステ・エレイソン (主よ憐れみたまえ) Christe eleison」の旋律 34-42 小節



【楽譜 1】モーツァルト《ソルフェージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393》の「ソルフェージュ2 Solfeggio 2」<sup>7)</sup> の旋律 1-5 小節

はへ長調「アダージョ (ゆっくり) Adagio」で書かれ、記譜上の音価は異なっている。

スワロフスキー<sup>7)</sup>は『ソルフェージュ』の序文に「このソルフェージュでは、最終的に、すべての音がクレッシェンド、デクレッシェンドそして、テクニックを伴った長い音を均一かつ朗々と保持されることが求められている」また、「全声域を同じ強さで歌い、しっかりとした支え、長く、そしてむらのない呼吸、豊かなメッサ・ディ・ヴォーチェ messa di voce (ピアノッシモで始まり、すべての中間段階の音強を経て、フォルテにまで増大し、再び同じテンポでピアノッシモにまで減少すること) で、すべての音域がゆるぎない歌唱で、表情豊かな音色を要求している」と記している。この《ソ

ルフェージュ》5曲の構成を【表 1】に示す。

《ソルフェージュ》は、変イ音から3点ニ音の音域で書かれている。音の跳躍は最大2オクターブに及び、コロラトゥーラの音型を一息で歌うフレーズが長いことが特徴としてあげられる。演奏技術には装飾音、とくに2度間隔を素早く歌う装飾音 (トリル) や、高音の保持および3連符を歌う能力が必要とされる<sup>7)</sup>。ちなみに、古典派からロマン派にかけての時代、ウィーン (ハプスブルグ家領) で一般的に使われたピッチは、A = 430Hz であったが、モーツァルトのピッチは、半音低かった<sup>20)</sup>。したがって、この《ソルフェージュ》における最高音の3点ニ音は、実際の演奏では半音ほど低く歌われたであろう。

【表 1】モーツァルトの『ソルフェージュと声楽練習 Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393』<sup>7)</sup> の構成

表記	小節数	調号	拍子	速度	音域
Solfeggio 1	96	ハ長調	4/4	Allegro (♩ = 112)※	変イ - 3点ニ
Solfeggio 2	24	へ長調	4/4	Adagio (♩ = 88)※	変ロ - 2点イ
Solfeggio 3 “Solfeggio per la mia cara consorte”	133	変ロ長調	2/4	Andante (♩ = 60 くらい)※	変ロ - 3点ニ
Solfeggio Fragment “Per la mia cara Costanza”	62	1-44 ハ長調 47-62 変ホ長調	4/4	Allegro	イ - 2点ロ
Exercizio per il canto (声楽練習)	35	ハ長調		表示なし	1点ハ - 2点イ

※ ( ) 内の数字は、スワロフスキー<sup>7)</sup>により記された速度の指示



この《ソルフェージュ》はコンスタンツェの歌唱能力と装飾法の技能を高める練習曲であり、演奏会で上演されることは殆どなく、第1章および第2章に記したように楽譜も長い間、出回ることがなかったため、その価値も知られていなかった。しかし、ウェイナント<sup>6)</sup>は、彼が編集した楽譜の序文で「モーツァルトは人間の声に対して思慮深く、とくに声の芸術に興味をもち、彼は歌唱テクニックの源を知っていた」と記している。また、スワロフスキー<sup>7)</sup>は楽譜の序文で、以下のように記している。この《ソルフェージュ》は、「モーツァルトがとりわけ歌唱に要求したものを集約したもので、大変貴重であり」、「コンスタンツェ《後宮からの誘拐 Die Entführung aus dem Serail K.384》(1782)、伯爵夫人《フィガロの結婚 Le Nozze di Figaro K.492》(1786)、ドンナ・アンナ、ドンナ・エルヴィラ《ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni K.527》(1787)、フィオールドイリージ、ドラベッラ《コシ・ファン・トゥッテ Così fan tutte K. 558》(1790)、また夜の女王《魔笛 Die Zauberflöte K. 620》(1791)を歌うのに必要なテクニックをすべて含んでいる」。上記に列挙された配役は、すべて《ソルフェージュ》作曲以降に作曲された後期オペラに登場する女性の役で、これらの役には、コロラトゥーラをはじめ、トリルや大幅な音の跳躍など、非常に技巧的で声楽のテクニックを必要とするアリアが作曲されている。金谷<sup>21)</sup>は、上記以外に、この《ソルフェージュ》作曲以前に作曲されたオペラ《ルーチョ・シッラ Lucio Silla K.135》のアリア「ああ、いとしい人の Ah, se il crudel periglio」のジュニア役のアリアの旋律と同じ旋律を《ソルフェージュ》の「断片」に見出し、モーツァルトがジュニア役を初演した一流の女性歌手アンナ・ルチア・デ・アミーチス (Anna Lucia de Amicis, 1733 頃 -1816) のために作曲したアリアの旋律の一部が、《ソルフェージュ》においては声楽家の妻コンスタンツェが歌うことを想定し、短3度低く「断片」に挿入されていたことを報告した。

#### 4. おわりに

モーツァルトの《ソルフェージュ》は今日、その存在を知る人が少ない。しかし日本でもここ数年、コンサートなどで演奏されるようになり、徐々にその存在が目されるようになりつつある。著者(金谷)と《ソルフェージュ》との出会いは、金谷が大学院に進学し

た時であった。恩師、莊智世恵名誉教授(国立音楽大学)は1962年ウィーンに留学中、当時、路地裏にあった楽譜店でこの《ソルフェージュ》の楽譜を入手し、日本にそれを持ち帰った。その後、先生は、日本ではまだ紹介されていなかったこのモーツァルトの《ソルフェージュ》について、NHK文化講座を担当していた海老沢敏氏の依頼により、《ソルフェージュ》の講演を行った(1981年頃)。おそらく、これが日本における《ソルフェージュ》の初めての紹介と思われる。その後、この楽譜は大切に先生の家の書棚に保管されていた。金谷が莊先生を訪問したとき、先生は書棚からこの楽譜を取り出し、著者に手渡された。以来、金谷は託されたこの《ソルフェージュ》を歌うため、先生の許で研鑽を積んだ。莊先生はスワロフスキー先生の授業を受けられたご縁がある。

本論文において、モーツァルトの《ソルフェージュ》について、作曲および楽譜出版の経緯、《ソルフェージュ》に要求される歌唱技術、および《ハ短調ミサ》をはじめ、モーツァルトの声楽曲とこの《ソルフェージュ》との関係について文献的考察を行った。

#### 謝 辞

本論文を書くにあたり、モーツァルトの《ソルフェージュ》の研究課題をいただき、以来、永年にわたりご指導を賜りました莊智世恵先生(国立音楽大学名誉教授)に心より感謝申し上げます。また、小野和人先生(元西南女学院大学人文学部教授)には、欧文論文の翻訳および英文抄録の作成のご指導をいただき、御礼申し上げます。文献資料収集に多大なご協力を賜りました西南女学院大学図書館の皆様にも深く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) Jander O: *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 23 Second Edition. Edited by Stanley Sadie and John Tyrrell. p.639, "Solfeggio". Oxford University Press, 2001
- 2) Köchel L R: *Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts*. 6. Aufl. bearb. von Giegling F, Weinmann A, Sievers G. pp.417-418, Breitkopf & Härtel. sole agents in U.S.A.:

- C. F. Peters Corp., New York, 1964
- 3) *Solfeggien für eine Sopranstimme mit und ohne Begleitung. W.A. MOZART.* Zum Theil unvollendet. K.393-2-5. Wolfgang Amadeus Mozarts Werke, Serie XXIV: Supplemente, Bd.2, No.49. pp.1-5 (77-81), Breitkopf & Härtel. Leipzig, 1885
  - 4) Luzio A: *Carteggi Verdiani IV.* pp.108-117, Roma, 1947
  - 5) Petrobelli P: Nochmals zu Mozarts Solfeggio KV385b/1. *MOZART-JAHRBUCH* 2011. pp.239-248, Der Akademie für Mozart-Forschung der internationalen Stiftung Mozarteum Salzburg, 2012
  - 6) Mozart W A: *Vocalises et Exercices pour soprano;* harmonization et interpretation de Weynandt M. Leduc A. Paris, 1953
  - 7) Mozart W A: *Solfeggien und Gesangsübungen K.-V.393.* 1956. Continuosatz von Eibner F, Herausgeben von Swarowsky H. Universal Edition. Wien, 1956
  - 8) Devieille S: *MOZART THE WEBER SISTERS.* Parlophone Records Limited, a Warner Music Group Company. Japan, 2015
  - 9) 野口秀夫: ソルフエージュ K.393 (385b) に見るコンスタンツェの技量. 神戸モーツァルト研究会. URL: <http://www.asahi-net.or.jp/~rb5h-ngc/j/k393.htm>, 1977 (2016/3/26)
  - 10) 武本浩: ハ短調ミサ曲. URL:<http://www.venus.dti.ne.jp/~kotani/OME/Missa-c-moll.html> (2016/03/26)
  - 11) Abert H: *W. A. MOZART.* Breitkopf & Hartel. Leipzig, 1923-4. Translated by Stewart Spenser edited by Cliff Eisen. p.699, Yale University Press. New Haven and London, 2007
  - 12) *Solfeggien für eine Sopranstimme mit und ohne Begleitung. W.A. MOZART.* Zum Theil unvollendet. K393-2-5. Wolfgang Amadeus Mozarts Werke, Serie XXIV. Supplemente, Bd.2, No.49. Plate W A M. pp.1-5 (77-81), Breitkopf & Härtel. Leipzig, 1885. URL:[http://hz.imslp.info/files/imglnks/usimg/e/ea/IMSLP81499-PMLP166051-Mozart\\_Werke\\_Breitkopf\\_Serie\\_24\\_49\\_KV393.pdf](http://hz.imslp.info/files/imglnks/usimg/e/ea/IMSLP81499-PMLP166051-Mozart_Werke_Breitkopf_Serie_24_49_KV393.pdf) (2016/5/8)
  - 13) Tyson A: *Mozart Studies of the Autograph Scores.* pp.222-233, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts and London, 1987
  - 14) Neue Mozart-Ausgabe. The Complete Works, Series I Sacred, Vocal Works. International Mozart Foundation, Online Publications. p.172, Salzburg, 1983. URL: [http://dme.mozarteum.at/DME/objs/pdf/nma\\_9\\_-28\\_-3\\_eng.pdf](http://dme.mozarteum.at/DME/objs/pdf/nma_9_-28_-3_eng.pdf) (2016/5/8)
  - 15) FAC SIMILE DUN SOLFEGE INDIT DE MOZART. *FRANCE MUSICALE*, No. 46. 14 November 1841. URL: <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k69658b> (2016/03/25)
  - 16) Zaslav N: Mozart's Salzburg Sacred Music and his Mass in C Minor, K.427. ニール・ザスロー著. 土田英三郎訳: モーツァルトのザルツブルグ時代の宗教音楽と《ミサ曲 ハ短調》K.427. 海老沢敏古希記念論文集. pp.116-133, 東京書籍. 東京, 2001
  - 17) Bauer W A, Deutch O E: *Mozart. Briefe und Aufzeichnungen. Gesamtausgabe.* hersg. von der Internationalen Stiftung Mozarteum Salzburg. 4 Bände. Bärenreiter-Verlag, Kassel · Basel · London · New York, 1962-1963. ヴィルヘルム・A・パウアー, オットー・E・ドイチェ共著, 海老沢敏, 高橋英雄編訳: モーツァルト書簡全集V. pp.399-427, 白水社. 東京, 1995
  - 18) Einstein A: *MOZART his character, his work.* Oxford University Press, Inc, New York. アルフレート・アインシュタイン著. 浅井真男訳: モーツァルト その人間と作品. pp.469-473, 白水社. 東京, 1961
  - 19) Mozart W A: Missa in C minor K.427 (417a). Urtext edition, Vocal Score. Ed. Holl M / Köhler K-H. pp. 5-8, Bärenreiter. Kassel, 2006
  - 20) Mancini R: *L'art du chant.* Presses Universitaires de France 1969. ロラン・マンシニ著. 海老沢敏訳: 歌唱芸術. p.176. 白水社. 東京, 1972
  - 21) 金谷めぐみ: モーツァルトのソルフエージュと声楽練習モーツァルト《声楽のためのソルフエージュ Solfeggien für eine Singstimme K.393 (385b)》の「断片 Fragment」とオペラ《ルーチョ・シッラ Lucio Silla K.135》のジュニアのアリア. 西南女学院大学紀要. 21 (本誌): 67-73, 2017

Mozart's "Solfeggien für eine Singstimme K393(385b) ":  
The Circumstances of its Composition and Publication,  
and its Relationship with Mozart's Other Vocal Pieces

Megumi Kanaya\*, Kohji Ueda\*\*

< Abstract >

The vocal pieces which Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) composed include "Solfeggien für eine Singstimme K.393(385b)" (hereafter referred to as "Solfeggien"). Totally there are five pieces in this "Solfeggien", all of which are said to be the études of vocal music composed by Mozart for his wife Constanze. Also, in these autographic scores, the phrases, 'per la mia cara consorte' or 'per la mia cara Costanza' had been added by Mozart. Incidentally, the second piece of "Solfeggien" (F major Adagio) has the same melody as the soprano solo, Missa in C minor K.427(417a), "Christe eleison".

In this treatise, the authors observed the process of the composition and publication of Mozart's "Solfeggien" for his wife Constanze, and the circumstances of its constitution, and also bibliographically examined the relationship between this "Solfeggien", and "Missa in C minor" and Mozart's other vocal pieces.

Keywords: Mozart, "Solfeggien", autographic scores, vocal pieces

---

\* Department of Welfare, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

\*\* Former professor at Seinan Jo Gakuin University